

の尊號や、光明本尊のあつた事が記録によつて知られる。

光明本尊であるが、彼の入宋僧、重源將來の五祖像、それから元祖から宗祖への眞影附屬、更に和讃、辨述各體鈔、算頭錄、各帳、繪系圖との連絡發展があるが今は省略する。

道場は文明十三年春秋尾張守幹勝が佛堂を造立し、木佛本尊を寄せた。其の台座の銘に唯圓以下道場主の世代の法名がある。寺號を泉溪寺とした。寛文年間破却され、下つて元祿の頃になり、水戸城主光圀により願入寺恵明の要請入れられ、更に復古して道場は報佛寺と改稱し建立された。

元の道場址は報佛寺門前三四丁へだつた處に古池がある。里人は泥鯨池と呼んで居る。それが正しく往時の道場のあつた處で、心字他の形を残して居る。七百數十年前は雜木林の深林地帯の中にあつたもので、原始教團の道場としてふさはしいものであつた。

吉田東伍の地名辭書には、唯圓は鳥喰の唯圓であつて、川和^{カワカ}田に唯圓の遺跡がないと云つてあるが、これは『交各帳』

『纂歸繪詞』敬重繪詞』によつて訂正しなければならぬ。それから平太郎と宗祖消息に出る中太郎の事は省略する。

論註に於ける五念門觀の一考

察

永・田 敬 信

世親の淨土論に説かれる五念門が願生者の往生行として示されたものであることは明かである。然るに曇鸞はこの五念門に就いて彼此二土に互つて修せられるべきものと釋してゐる。この解釋は此土行としての五念門に彼土行として性格が示されたものであるが、更に註主の意を強調するならば、むしろ五念門の全き行相は彼土に於て期すべきであり、此土に於てはその一分が行ぜられ得るものと云ふてよい。古來かうした曇鸞の解釋は、彼の人間相自覺に依つて、高遠なる五念門の行相を凡夫易修のものとなしたといはれ、その價值が高く評價せられてゐる。しかし凡夫の易修だけが願はれてこの釋が施されたのであれば、凡夫の修し

得る行としての意義は明らかになつても、そのために往生行としての價值が失はれることにもなる。随つて五念門自らに彼此二土の行として展開すべき必然性がなければならぬ。而して凡夫易修の義はその必然的歸結であるべきである。

かうした場合常に用ひられる教證と理證に依つて明らかにしてみよう。先づ教證としては、還相廻向の文と園林遊戲地門とを對比するとき、五功德門が彼土行の直接の根據であることを推知するに難くはない。次に理證としては觀察門をその中心とする五念門の起行的意味を擧げることが出来る。即ち觀察門が淨土の三種莊嚴を觀するものである限り、觀は自らの起行的意味を否定する。何故なれば淨土は三界苦惱の衆生を大悲する如來の願心に依つて莊嚴せられるものであるから、淨土を觀するものは願心を觀せしめらるのである。こうして觀察門に依つて如來の願心に直接せしめられるとき、淨土を觀しようとする起行的意識は否定せられ、たゞ大悲せられる自己の現實への反省あるのみである。曇鸞が五念門の此土行をその一分を修するものとしたのは

決して五念門の一分を以つて往生行としての價値が十分であると云はうとするのではなく、五念門が起行としての自己を否定することを示すものである。この故に觀の成就を以つて「眞實の淨信」なりとし、「信佛の因縁」を以つて得生を顯されるのである。即ち信佛の因縁に依つて往生するといふことは、佛の願力に乗じて往生せしめられることである。されば五念門は往生のための行ではなく、實に曇鸞の如き凡夫をも往生せしめられることを領知する行といふべきである。

かくの如く五念門が領解せられるとき、更に五念門は新たな意義をもつのである。それは讚嘆門を中心とした五念門である。即ち如來の名號を讚嘆することに依つて、つねに如來の願心を念ぜしめられ、眞實信が生ずるのである。三種莊嚴の體を名號なりと釋し、讚嘆門で淳一相續の信が説かれるのは、曇鸞にとつて讚嘆門こそ五念門を統攝し、如來の願心を信知せしむるものであつたことを示すものである。併し尙そこに善導に見られる如き稱名念佛の義を見ることは出來ない。

十住毘婆沙論に對する試攷

——難易二道について——

長谷岡 一也

龍樹は易行品に於て「佛無有無量門、如世間道有難易……」と難易二道の教説を展開してゐるが、そこに「易行道」或は「信方便易行」と譯されてゐるものは、*sukha pratipad* *であり、「行諸難行」といふ難行とは *duṣkara* といふ語であつたのでなからうか。ただし、十住毘婆沙論には「難行」の語はあつても難行道といふ語のないことは既に學者の指摘するところであるが、*duṣkara* といふ語からは、さういふ「難行道」といふやうな意味は導き出されてこない。易行道に對して難行道なる語を掲げ、以て教相判釋としての難易二道といふものを展開せしめて行つたのは、曇鸞の淨土論註であつた。さういふ意味に於て、論註にいふところの難行道とは、先の *sukha pratipad* と對蹠的に用ひられる *duṣkha pratipad* * といふ語が充當せられるのでなからうか。また、易行品に「……世間

道有難有易……」と示された難とは *duṣkha* であり、易とは *sukha* といふ語であつたのでなからうか。

易行道とは、「信方便易行」(*grādha-upāyasukha-pratipad*) と規定せられ、更に易行品彌陀章では信疑の得失を判じて

若人種善根 疑則垂不開
信心清淨者 華開則見佛

即ち心の清淨 (*citra-prasāda*) を本質とする無我の行である。そして第十章除業品の劈頭には、易行道によつて體得せられた「信心清淨」の了解は、決ず懺悔・勸請・隨喜・廻向の行へと展開し、以て限りなき自力の有執と一切群生海とが見出されて、それが教化されるころの智慧より大悲への轉回を取るべきことが示されてゐる。しかし、不退轉地に於て、さういふ罪業深重といふ絶對否定としての懺悔が要請せられるといふことは、易行品の言葉で言へば、丈夫志幹を以て任ずる我慢の心が打破せられて、「憊弱怯劣」といふ自己の無能、自力無効といふことが見出されて行かなければならない